

医療法人社団爽風会 おその整形外科

(東京都葛飾区)

東洋医学から心身医学療法まで駆使し 患者の痛みをとることに全力を尽くす



「常に患者さんの痛みと向き合ってきました」と話す於曾能正博院長

注目POINT!

① 患者の痛み除去のために総合的なアプローチを図る

整形外科、リハビリテーション、ペインクリニック、東洋医学、心療内科など、各種治療法を駆使して患者の痛みを可能な限り取り除く。

② 常に患者の状態を把握し医療安全対策を徹底

高齢患者が6割を占めることから、医療事故が起こらないように細心の注意を払う。スタッフには、患者の変化を素早く察知できるように指導。

③ 職員とのコミュニケーションを深め士気を高める

リハビリテーションスタッフをはじめ職員数が多いため、個々の職員とのコミュニケーションを深めて職場の風通しを良くしている。

痛みに向き合うことで 患者の心の問題にもかかわる

患者の痛みをとるために、保存療法や手術療法にとどまらず、東洋医学から心身医学療法まで、あらゆる手立てを尽くすおその整形外科の於曾能正博院長。「私の生涯の研究テーマは『痛み』。痛みをとってほしいという患者さんの立場に立つて、できることは何でもやります」と話す。

於曾能院長は横浜市立大学医学部時代から漢方や鍼など東洋医学に興味をもち、卒業後はN.T.T.東日本関東病院のペインクリニック科レジデントを経て整形外科に転向。1993年に下町の風情が残る葛飾区お花茶屋で開業した。

葛飾区は高齢化率が高く、患者層も6割は高齢者が占め、主に首、腰、膝の痛みを訴える。整形外科的療法(レーザー、低周波、牽引、マッサージ、投薬)のほか、リハビリテーション、神経ブロック、東洋医学(漢方、鍼)、心身医学療法を駆使して治療に当たる。

整形外科専門医が心療内科を標榜することは珍しいが、「患者さんの痛みと向き合うと、心の問題に

もかわらざるを得ない」。うつ病をはじめ精神疾患が腰痛や肩凝りなど身体症状に表れたり、逆に痛みから気分がふさいでうつ状態に陥ることもある。「痛みをとることで、心も軽くなる患者さんが多い」と言う。同院はカウンセリングや自律訓練法の指導、抗うつ剤の処方などで治療している。

昨年12月に発足した厚生労働省健康局「慢性の痛みに関する検討会」は、慢性疼痛保有者が約1700万人いるとしたうえで、「診療科の枠組みを超えた総合的、集学的なアプローチが必要」と課題を整理した。於曾能院長の診療方針は、国の方向性を先取りした取り組みといえる。

同院の総合的なアプローチによって痛みをまったく感じなくなる患者もいるが、加齢による関節の変形・磨耗から生じる痛みを完治させるのは難しい。たとえ完治できなくても、生活に支障がないように痛みを軽減し、患者がQOLを高めることができるように治療している。

整形外科疾患は治療とともに、日常生活の改善も大切といえる。於曾能院長は肥満で膝に負担がか



↑患者がリラックスできるように壁紙に風景の写真を使ったX線撮影室

勢ぞろいしたおその整形外科のスタッフ。中央が於曾能院長→



↓治療用のベッドが並んだリハビリテーションルーム



リハビリテーションで使用する平行棒



患者の痛みをとるために活用するウォーターベッド

医療法人社団爽風会 おその整形外科
 東京都葛飾区お花茶屋1-12-5
 TEL : 03-3690-8288
 URL : <http://www.ostonoseikei.com/>
 診療科目：整形外科、リハビリテーション科、
 リウマチ科、心療内科

職員は仕事や私生活をはじめ、さまざまな悩みを抱える。「不満がたまりにたまって、いきなり退職とならないように、何でも話せる風通しの良い職場をつくるようにしています」と話す。

**「スタッフは私の全財産」
風通しの良い職場をつくる**

「スタッフは私の全財産です」と於曾能院長。同院にはリハビリスタッフをはじめ大勢の職員がいるが、全員を大切にしている。ホームページには職員全員の趣味や院長の評価を写真つきで掲載。親睦を深めるための職員旅行の様子も載っている。

患者のなかには、身体の調子が悪くても無理をしてリハビリを受ける人もいる。同院は事前に水分や朝食の摂取を確認、血圧を測るなど患者の状態を把握してからリハビリを行う。

スタッフにはリハビリ技術の向上はもちろんのこと、患者のちょっとした顔色やしぐさの変化を敏感に感じる感性を身につけてもらえるように指導している。患者の状態を素早くキャッチして、報告してもらわないと医療事故につながりかねないからだ。

同院はリハビリ用に広いスペースを確保し、多くの専門職員を雇用している。整形外科は収入が多いとして政府の診療報酬の事業仕分けでも槍玉に上がったが、於曾能院長は「売上は多いかもしれないが、家賃や人件費等を差し引くと院長個人の収入は他科と変わらないか、それ以下」と説明する。

於曾能院長はリハビリを「バランスを失いかけた自転車を、ちよつと押してあげる作業」にたとえる。「いったん倒れてしまうと、立ち上がるのは容易ではない。倒れないように、継続したりリハビリが大切です」と指摘する。